

No. 1000

特 集

日 本 の 歩 み

昭和20年8月、日本は大混乱の中に終戦を迎えた。……天皇「終戦」の詔勅放送……。

昭和25年6月、朝鮮戦争が勃発し、7月、マッカーサーは警察予備隊を創設、海上保安庁増員を指令した。第3次吉田内閣は昭和26年6月、対日平和条約・日米安全保障条約を調印し、日本の進路を大きく規制した。昭和35年、日本中が、新安保条約の調印を巡って大きく揺れた。しかし、岸内閣は多くの世論を無視、ついに強行採決に踏み切った。国内の混乱を押え切れなくなった岸内閣は退陣し、激しい政権争いが行なわれた。国民は極度の政治不信に陥り、政治に背を向けた。新首相池田さんは「所得倍増」と大見栄を切った。しかし、一方では「山」を追われた人々や釜ヶ崎で、職を失った人々があふれた。高度経済成長をめざす社会の中で、その底辺に残される人々との二重構造が差をひろげる原因となった。安保のエネルギーは消え去り、無気力な国民が太平のムードにひたっている時、日本は経済大国軍事大国への道を歩み始めた。

こんな中で起きた、横須賀線鶴見での二重衝突、更に三池三川鉱でのガス爆発、一日で600人以上の死者を出した。安全よりも経済の成長を急いだ結果ではなかったろうか。昭和39年、華々しく国際社会へ復帰した。東京オリンピックは、その頂点である。だが、余りにも急速な発展は少しずつ「ひづみ」を生じた。繁栄の陰で倒産の嵐が吹き荒れた。オリンピックと不況がはっきりした明暗で浮き彫りされた狂った年、池田内閣は倒れた。

池田内閣を批判した佐藤首相ではあったが、安易に高度成長経済のブームに乗り、繁栄の中の危険分子をはらおうとはしなかった。政治不在を象徴するように大事故も続発した。若者は、サイケデリックな化粧にこり、ゴーゴーに酔いしれ、精神の荒廃が心配された。華やかに明治百年が祝福された中で、若者は生きる目的と方向を失ない社会から断絶していった。

大学紛争はこんな中で起こるべくして起った。

万国博では現代科学と機械文明が高らかに称賛され、日本は経済大国の地位を世界に示した。だが、この繁栄こそが、日本の姿を灰色にぬりつぶしていった。

日本中のあらゆる公害が告発された。水俣、P・C・B、光化学……。

8年の長期に亘る佐藤政権は最底の支持率を記録し退陣。

「列島改造」をひっさげ、今様太閤田中首相はさっそうと登場。

だが「列島改造」は切り札とはなれなかった。これまでに積み重ねられていた矛盾は一層拡散された。

物価や土地の高騰を招き、人々の生活は苦しくなるばかりだ。

急テンポで複雑に進んでいく現代。

今、この繁栄さえもが、かげりを見せはじめた。

日本はこれから、どう変わってゆくのだろうか。